キャンパス・コラム

ドイツ年

梅雨のうっとおしい季節が続いている。もう夏も近い。フランスも、この季節が一年で一番いい。４月に木々が一斉に新芽を吹き出す。あの木は何と言う木なのだろうか、今ごろ市中の木が一斉に白い花をつける。

日本でも夏祭りが始まっているが、パリでは夏至の６月21日に「音楽祭」が行われた。市中の各地区ごとに広場や通りでシャンソンからヘビメタまで夜遅くまで演奏される。この日は無礼講で、大通りの車道まで人があふれかえる。車はほとんど身動きが取れない。バスティーユにあるオペラ座も上演が無料開放される。長蛇の列で、僕が留学した時も結局入ることは出来なかった。

オペラといえば、今年は「ドイツ年」で演劇やオペラが来日している。演劇では、フォルクスビューネが『最終駅アメリカ』をすでに上演した。６月とはシャウビューネが『ノラ』と『火の顔』を、ベルリナー・アンサンブルが『アルテゥーロ・ウイの興隆』を上演した。まだ先だが、オペラはミュンヘン歌劇場が『アリオダンテ』他を、シュツットガルト歌劇場が『魔笛』を上演する。

『アリオダンテ』はヘンデルのオペラで、舞台の上に16世紀初演当時の装置が組まれ、仕掛けも初演当時のものを使って演じられる。

『魔笛』はコンヴィチュニーの演出だ。彼の演出した『神々の黄昏』がDVDで出ている。およそワグナーらしくない演出のようだ。音楽雑誌の批評では糞味噌に叩かれている。僕は見ていないから云々する資格はないが、音楽評論家はブレヒトの異化作用という言葉も知らないのかと思ってしまう。『魔笛』も曲の配列から見直しが行われているそうで、メルヘンチックではないらしい。

ドイツ演劇の同僚から、何をおいてもこの二つを見るように勧められている。口車に乗って見に行くつもりだが、その前にまずは日本の蒸し暑い梅雨の季節を乗り切らなくてはならない。

広報委員　橋本能（商学部教授）